

復刻版『吉里吉里語辞典』のご案内

1. 吉里吉里語辞典とは

岩手県上閉伊郡大槌町は、東日本大震災により甚大な被害を受けました。井上ひさしの小説『吉里吉里人』によってかつて全国に名前が知られた、この大槌町に属する「吉里吉里」という小さな湾を囲む町もまた大きな被害を受け、多くの住民の住宅、商店、職場が津波によって破壊され、流されてしまいました。

この吉里吉里地域には独特の方言があります。同じ大槌町に属する「安渡」や「町方」で用いられている方言とも少し異なる方言です。この方言—吉里吉里語—を標準語で解説・説明した辞典『吉里吉里語辞典』が、吉里吉里で暮らす関谷徳夫さんによって 2007 年に出版されました。そこには、吉里吉里地域で古くから受け継がれてきた伝統的な価値観や生活がいきいきと描かれています。

たとえば、「相続心（そうぞくこ°ごろ）」という吉里吉里語があります（「こ°」は「ご」の鼻濁音を指します）。ある人物の子どものころを回想して、「大将あワラスなあから相続心のある奴だったあよ」などと評する場合などに用いられます。意味は、「あの旦那は子どもの頃から、家計を維持することを第一義と心得て、少しでもそれに資するよう努める心構えをもった子どもだったよ」となります。この言葉からは、吉里吉里の人々が「相続心」という生活理念を大切にしてきたことがわかります。このように、吉里吉里語辞典には吉里吉里での伝統的な人々の生活が記録されているのです。



流される前の『吉里吉里語辞典』

2. 文字データの復旧、復刻版出版に向けての活動

この『吉里吉里語辞典』は、東日本大震災の大津波により、著者である関谷徳夫さんの自宅もろとも、そこに保管されていた在庫の全てが流されてしまいました。また、『吉里吉里語辞典』を印刷した釜石にある東海印刷所も、1階にあった印刷機が津波により破壊されてしまうという大きな被害に遭いました。

2011年6月、津波で流された品々を整理するボランティアを明治学院大学の学生が行っていた時、流された『吉里吉里語辞典』を1冊発見してくれました。それを東京に持ち帰り、しわを伸ばしつつ全ページスキャンし、画像データにしました。この画像データを見ながら、一文字ずつ手で入力し文字データに変換するという作業を、ボランティアにお願いすることになりました。明治学院大学ボランティアセンターおよび広報課が学内をはじめ全国に呼びかけて



スキャンした画像データ

くださったおかげで、134 名の方がボランティアとしてこの作業を分担してくださり、2011 年 11 月 20 日に全ページの文字データ化作業が完了しました。

その後、入力データの校正作業を著者である関谷徳夫さんにお願ひし、徳夫さんの修正を文字データに反映させる作業を約 1 年間おこなってきました。

と同時に、流される前の版では実現できなかった、アクセント記号を追加する作業も並行して行っていただきました。標準語でも「橋」と「端」ではアクセントをおく位置が異なり、アクセントによっては異なった意味の言葉と理解されることになります。吉里吉里語も同様で、アクセントは大切な情報であり、その記号を新たに付ける作業をいたしました。2012 年内には全ページの校正作業とアクセント付加作業が終わる予定です。

項目	内容
校正	① 誤植の修正 ② 誤字の修正 ③ 誤脱の修正 ④ 誤挿の修正 ⑤ 誤置の修正 ⑥ 誤記の修正 ⑦ 誤読の修正 ⑧ 誤写の修正 ⑨ 誤用（誤用）の修正 ⑩ 誤用（誤用）の修正 ⑪ 誤用（誤用）の修正 ⑫ 誤用（誤用）の修正 ⑬ 誤用（誤用）の修正 ⑭ 誤用（誤用）の修正 ⑮ 誤用（誤用）の修正 ⑯ 誤用（誤用）の修正 ⑰ 誤用（誤用）の修正 ⑱ 誤用（誤用）の修正 ⑲ 誤用（誤用）の修正 ⑳ 誤用（誤用）の修正 ㉑ 誤用（誤用）の修正 ㉒ 誤用（誤用）の修正 ㉓ 誤用（誤用）の修正 ㉔ 誤用（誤用）の修正 ㉕ 誤用（誤用）の修正 ㉖ 誤用（誤用）の修正 ㉗ 誤用（誤用）の修正 ㉘ 誤用（誤用）の修正 ㉙ 誤用（誤用）の修正 ㉚ 誤用（誤用）の修正 ㉛ 誤用（誤用）の修正 ㉜ 誤用（誤用）の修正 ㉝ 誤用（誤用）の修正 ㉞ 誤用（誤用）の修正 ㉟ 誤用（誤用）の修正 ㊱ 誤用（誤用）の修正 ㊲ 誤用（誤用）の修正 ㊳ 誤用（誤用）の修正 ㊴ 誤用（誤用）の修正 ㊵ 誤用（誤用）の修正 ㊶ 誤用（誤用）の修正 ㊷ 誤用（誤用）の修正 ㊸ 誤用（誤用）の修正 ㊹ 誤用（誤用）の修正 ㊺ 誤用（誤用）の修正 ㊻ 誤用（誤用）の修正 ㊼ 誤用（誤用）の修正 ㊽ 誤用（誤用）の修正 ㊾ 誤用（誤用）の修正 ㊿ 誤用（誤用）の修正
校正	① 誤植の修正 ② 誤字の修正 ③ 誤脱の修正 ④ 誤挿の修正 ⑤ 誤置の修正 ⑥ 誤記の修正 ⑦ 誤読の修正 ⑧ 誤写の修正 ⑨ 誤用（誤用）の修正 ⑩ 誤用（誤用）の修正 ⑪ 誤用（誤用）の修正 ⑫ 誤用（誤用）の修正 ⑬ 誤用（誤用）の修正 ⑭ 誤用（誤用）の修正 ⑮ 誤用（誤用）の修正 ⑯ 誤用（誤用）の修正 ⑰ 誤用（誤用）の修正 ⑱ 誤用（誤用）の修正 ⑲ 誤用（誤用）の修正 ⑳ 誤用（誤用）の修正 ㉑ 誤用（誤用）の修正 ㉒ 誤用（誤用）の修正 ㉓ 誤用（誤用）の修正 ㉔ 誤用（誤用）の修正 ㉕ 誤用（誤用）の修正 ㉖ 誤用（誤用）の修正 ㉗ 誤用（誤用）の修正 ㉘ 誤用（誤用）の修正 ㉙ 誤用（誤用）の修正 ㉚ 誤用（誤用）の修正 ㉛ 誤用（誤用）の修正 ㉜ 誤用（誤用）の修正 ㉝ 誤用（誤用）の修正 ㉞ 誤用（誤用）の修正 ㉟ 誤用（誤用）の修正 ㊱ 誤用（誤用）の修正 ㊲ 誤用（誤用）の修正 ㊳ 誤用（誤用）の修正 ㊴ 誤用（誤用）の修正 ㊵ 誤用（誤用）の修正 ㊶ 誤用（誤用）の修正 ㊷ 誤用（誤用）の修正 ㊸ 誤用（誤用）の修正 ㊹ 誤用（誤用）の修正 ㊺ 誤用（誤用）の修正 ㊻ 誤用（誤用）の修正 ㊼ 誤用（誤用）の修正 ㊽ 誤用（誤用）の修正 ㊾ 誤用（誤用）の修正 ㊿ 誤用（誤用）の修正
校正	① 誤植の修正 ② 誤字の修正 ③ 誤脱の修正 ④ 誤挿の修正 ⑤ 誤置の修正 ⑥ 誤記の修正 ⑦ 誤読の修正 ⑧ 誤写の修正 ⑨ 誤用（誤用）の修正 ⑩ 誤用（誤用）の修正 ⑪ 誤用（誤用）の修正 ⑫ 誤用（誤用）の修正 ⑬ 誤用（誤用）の修正 ⑭ 誤用（誤用）の修正 ⑮ 誤用（誤用）の修正 ⑯ 誤用（誤用）の修正 ⑰ 誤用（誤用）の修正 ⑱ 誤用（誤用）の修正 ⑲ 誤用（誤用）の修正 ⑳ 誤用（誤用）の修正 ㉑ 誤用（誤用）の修正 ㉒ 誤用（誤用）の修正 ㉓ 誤用（誤用）の修正 ㉔ 誤用（誤用）の修正 ㉕ 誤用（誤用）の修正 ㉖ 誤用（誤用）の修正 ㉗ 誤用（誤用）の修正 ㉘ 誤用（誤用）の修正 ㉙ 誤用（誤用）の修正 ㉚ 誤用（誤用）の修正 ㉛ 誤用（誤用）の修正 ㉜ 誤用（誤用）の修正 ㉝ 誤用（誤用）の修正 ㉞ 誤用（誤用）の修正 ㉟ 誤用（誤用）の修正 ㊱ 誤用（誤用）の修正 ㊲ 誤用（誤用）の修正 ㊳ 誤用（誤用）の修正 ㊴ 誤用（誤用）の修正 ㊵ 誤用（誤用）の修正 ㊶ 誤用（誤用）の修正 ㊷ 誤用（誤用）の修正 ㊸ 誤用（誤用）の修正 ㊹ 誤用（誤用）の修正 ㊺ 誤用（誤用）の修正 ㊻ 誤用（誤用）の修正 ㊼ 誤用（誤用）の修正 ㊽ 誤用（誤用）の修正 ㊾ 誤用（誤用）の修正 ㊿ 誤用（誤用）の修正

アクセント記号が追加された復刻版の組見本

3. 被災地で印刷し、被災地で販売する

この復刻版『吉里吉里語辞典』出版計画について、2012 年 11 月 21 日の朝日新聞夕刊で取り上げていただいたことも奏功し、購入希望者が 270 名を超えました。そこでハーベスト社より、2013 年 3 月 11 日に刊行していただけることになりました。印刷は、被災後に新しい印刷機を導入し復興に向けて歩み始めた「東海印刷所」さんに、再度担当していただけることとなりました。また販売は、被災後に書店が大槌町内に一軒もない状況を憂いて被災後にオープンした、大槌町で唯一の書店である「一頁堂書店」さんから販売していただけることとなりました。現在、一頁堂書店さんにて、販売価格および販売方法（代金の支払い方法や発送方法など）を検討していただいております。

4. ご協力のお願ひ

復刻版『吉里吉里語辞典』の出版は、吉里吉里の伝統的な生活と文化を守ることにつながるのみでなく、東海印刷所と一頁堂の復興を後押しし、その点で雇用の場の確保にもつながります。また、復興の兆しが見えにくい大槌町にとって、復興のシンボルのひとつとなり得ると思います。この小さな本を購入することを通して、被災地復興支援活動に貢献することができます。みなさまのご協力をお願い申し上げます。

＜本件についてのお問い合わせ先＞

一頁堂書店

〒028-1121 岩手県上閉伊郡大槌町小槌 27-3-4 シーサイドタウン マスト 1F

TEL・FAX 0193-42-4189 E-mail : ichipagedo@train.ocn.ne.jp

本件につきましてお寄せいただいたご質問に対する回答

質問1：なぜ、紙媒体での出版にこだわるのか。WEBなどで公開すれば、費用負担なく吉里吉里語を後世に残せるではないか？

回答1：私たちも、多くの方々に「吉里吉里語」を知っていただき、この言葉が伝える生活習慣や文化を後世に残すために、WEBでの公開を考え、既に2011年から準備に着手してきました。明治学院大学の学生ボランティアたちが、吉里吉里で暮らすみなさんに吉里吉里語を話していただき、音声を録音し、吉里吉里の言葉にまつわる思い出を録音した上で文字起こしし、伝統芸能のビデオを撮影しています。関谷徳夫さんの『吉里吉里語辞典』にこれらを追加して、WEBにて公開できるように準備を重ねて参りました（詳しくは明治学院大学浅川研究室のWEBサイトをご覧ください）。

しかしながら、WEBでの公開は、紙媒体での出版の後に行うべきであると考えています。理由は以下の3点にあります。

(1) 現地のインターネット環境が未整備であること。岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里ではインターネット環境は整備されておらず、WEBで公開しても、アクセスできる人はごく少数です。次世代を担う子どもたちも、WEBを通じてでは、吉里吉里語辞典にアクセスできない状況にあります。

(2) 「復興」を実感できる目に見えるモノが必要とされていること。吉里吉里も他の津波被災地と同様に、目に見える復興は進んでいません。もちろん復興計画等は動いているのですが、それは目に見えないのです。復興過程が見えないかで、じっと耐え続けなければならない現在の被災地で暮らす人びとは、目に見える復興の形を切望しているのです。

『吉里吉里語辞典』を冊子体で出版すれば、仮設店舗で営業している飲食店などにも置いていただくことができます。ひとつの「復興」の形を、手に取ってみることができるのです。

(3) 著者である関谷徳夫さんが、WEBでの公開よりも前に、まず冊子体での出版を行って欲しいと強く希望されていること。

これらの点から、冊子体での出版を先行するべきであると判断いたしました。

質問2：なぜ関谷徳夫さん、東海印刷所という特定の個人や事業所の支援をするのか？

回答2：我々の支援は、「対口支援」という考え方に基づいています。ご承知の通り、この考え方は四川大地震の復興支援から採用されるようになった支援方法であり、被災地と支援者が対になって復興支援活動を行うという方法です。明治学院大学は大槌町と正式に協

定を結び、大槌町の復興を支援し続けるという態度を表明しています（2012年3月に協定を結びました）。

大槌町に対する支援ではあっても、他の被災地に対する支援にならないのだから、大槌町のみに対する支援を行っても意味がないとは、おそらくどなたもお考えにはならないと思います。明治学院大学が大槌町を支援し、たとえば、他の大学が宮古市を支援し、被災地以外の自治体が釜石市を支援する、というように支援の輪が広がっていくことを、むしろ期待するだろうと思います。

個人や一事業所を支援するのも、同じ理由です。復興に向けて動き出した、あるいは動き出そうとしている個人や企業を支援する。そのような支援が複数動き出せば、やがては被災地全体の復興支援につながっていくと期待できます。

確かに、行政からの支援は、一個人や一事業所に対してだけ行うことは難しいです。したがって、我々のような民間がそのような支援、広義の「対口支援」を担う必要があると、考えております。

文責：浅川達人（明治学院大学社会学部教授）

asakawa@soc.meijigakuin.ac.jp